

平成 19 年 7 月 7 日

第 28 回鴨川義塾講演資料

福澤諭吉協会

大久保啓次郎

福澤諭吉 と 勝 海舟

(1835～1901) 66 歳没

(1823～1899) 76 歳没

——四つの戦争に対する二人の対照的な態度と考え方——

1. はじめに

福澤諭吉と勝 海舟は共通で、生涯に於いて四つの大きな戦争を経験している。第二次長州征討（幕府と長州の戦争）、維新戦争（幕府と薩長の戦争）、西南戦争（明治新政府軍と西郷隆盛らの旧薩摩藩士族の戦争）、日清戦争（日本と中国の戦争）の四つである。

この四つの戦争に対して、福澤が執った態度は、第一には促進的、第二には傍観的、第三には否定的であったが、第四の場合には非常に扇動的な行動を執った。

これに対して、勝が執った態度は、第一には阻止的、第二には終戦的、第三には消極的であったが、第四の場合には極めて厭戦的であった。

このように、維新前は同じ幕臣であった福澤と勝の二人が、上記四つの戦争に対して、その時の状況判断で、悉く相反する態度を執った事は、非常に興味深いところである。

2. 第二次長州征討

（福澤諭吉）

福澤諭吉は 1862 年ヨーロッパからの帰航の舟で、いわゆる大名同盟論のハシリのよ
うな説を口にしたが、（福翁自伝：王政維新 [洋行船中の談話]）帰国後 2、3 年の国内
情勢の推移（尊攘攘夷思想が強くはびこる時世）を見てこの難局を乗り切るには幕府の
権力を強大にする（大君のモナルキ＝ [将軍の独裁]）しかないと考えようになる。

そして慶応 2 年（1866 年）7 月 29 日、「長州再征に関する建白書」を、幕府の長州
再征に際して木村撰津守に示す。木村は 9 月 6 日京都で、老中小笠原長行に提出する。

福澤の意見は突飛なものではなく、当時の幕府内部の有力意見とも合致していた。
建白書の内容は、フランスから借金をして又軍隊も借りて、長州を倒し、ついで薩摩も
倒し、朝廷に圧力をかければ、幕府に楯突く勢力は消滅し、幕府中心の絶対的中央集権
国家が確立するというものであった。

しかし、フランス公使ロッシュの仲介で、小栗勘定奉行や栗本外国奉行がフランス本

国と交渉するも、イギリス公使パークスの横槍が入り、この話はお破算になる。そして、第二次長州征討は、幕府側の敗退により長州と停戦せざるを得なくなり、失敗に帰す。

(勝 海舟)

勝 海舟は 1862 年頃には、松平慶永—横井小楠の影響を受けて、幕府の「私」の政治を否定し「公」の政治を主張。公武合体・雄藩連合の「近代的統一国家」の創立を考えていた。1862 年 8 月に坂本龍馬と、1864 年 9 月に西郷隆盛と、初対面し「幕府に天下の政治は無理、これからは幕府と雄藩連合で国政を行うべし」と訴える。

したがって、勘定奉行の小栗忠順と老中板倉勝静から、長州再征に当たり福澤の「建白書」の内容のようなものを聞かされるが、「真に日本の事を考えるなら、徳川氏が自ら倒れ、自ら領地を削って、国政を担当する能力の有る者が政権を担当するように力を尽くすべきである。薩長を憎み、これを倒すなどともない事である。」と意見する。

こうして、勝は長州再征をフランスとの軍事的提携によって貫徹しようとする小栗、栗本らに対して（間接的にはあるが、福澤に対しても）真っ向から対立する。

3. 維新戦争

(福澤諭吉)

長州再征が幕府の屈辱的敗北に終わると、福澤は幕府に対してもはや一縷の望みも持てなくなり、慶応 3 年（1867 年）になると、公然と幕府打倒を口にするようになる。{「福翁自伝」:[再度米国行]の(幕府を倒せ)}を参照。

とって、薩長の攘夷勢力には、幕府どころではなく、到底希望は持てなかった。何故幕府にも薩長にも加担しなかったかの理由を、{「福翁自伝」:[王政維新](洋行中の談話)}の後段で勤王佐幕に対する態度として述べているが、その中の「第三、東西二派の理非曲直はしばらくさておき、男子がいわゆる宿昔青雲の志を達するは、乱世にあり、勤王でも佐幕でも試みに当たって砕けるという書生のことであるが、私にはその性質習慣がない。」が福澤の維新戦争に対する態度としての本音であろう。

こうして政治に強くコミットして絶望した福澤は、これ以後政治との間に距離を置き、幕府にも薩長にも迎合せず、後進の教育に取り組むことになる。

そして慶応 4 年=明治元年（1868 年）5 月 15 日、上野で官軍と彰義隊の戦いがあった日、芝新銭座の慶応義塾に於いて、福澤は遥かに砲声を耳にしながら、我関せずで、ウエーランド経済書の講義をしていた。

(勝 海舟)

第二次長州再征に失敗した幕府は、慶応 3 年（1867 年）10 月に大政奉還をするが、薩長を中心とした倒幕派はこれを無視して、12 月に王政復古クーデタを企てる。

これに対して幕府は、慶応 4 年=明治元年（1868 年）1 月、薩長に対して鳥羽・伏

見の戦いを挑むが、敗北を喫する。初戦で徳川慶喜は戦意を喪失し、軍艦開陽丸で江戸へ逃げ帰る。

1月23日に陸軍総裁に昇格した勝海舟は、2月11日に慶喜主導の徳川家首脳会議で「慶喜恭順」の方針が決定するや、薩長を中心とした倒幕派（官軍）との交渉を任される。

徳川の「私」の巢窟を一掃しつつも、徳川の威厳を保持する為には、官軍との主戦論を断固排除して、話し合いに持ち込まねばならないと考えた勝海舟は、イギリス公使パークスを巧みに利用して、西郷隆盛との江戸無血開城談判に成功する。

しかし、一戦も交えず官軍に敗れたのは、「数百千年養い得たる我日本武士の気風を傷うた」（福澤諭吉著：瘠我慢の説）として、後年、福澤諭吉から厳しく批判されることになる。

江戸無血開城は実現したが、海舟には一大名としての徳川家の処遇という課題がまだ残っていた。海舟は、「慶喜恭順」の実績によって、徳川家の処遇は寛大に決定されるだろうと考えていたが、以外に厳しく、官軍から慶喜の居城は（江戸から）駿府で、禄高は（400万石から）70万石と発表される。徳川家処遇の交渉は海舟の完敗であった。

慶応4年＝明治元年（1868年）5月15日、福澤諭吉が上野戦争の砲声を耳にしながら慶応義塾で講義していた時、勝海舟は徳川一門の家（田安家）にいて命拾いをしたとはいえ、官兵に私邸を略奪されていた。

4. 西南戦争

（福澤諭吉）

明治10年西南の役の場合には、福澤は徹頭徹尾、この戦争に反対であった。

福澤諭吉と西郷隆盛とは生涯に於いて、互いに一度の面識もなかったが、西郷は福澤の著書を常に愛読して常にその議論識見の卓越している事を賞賛していたし、又福澤は西郷の人物精神を尊重してこれを一世の人傑と認めており、両者の間には互いに敬慕の念があったものと推察される。

明治10年2月、西郷が兵を率いて鹿児島を発したとの警報があった時、福澤は筆を執って「西郷が兵を率いて暴発したのは不問に付する事は出来ないが、彼にも言い分があるであろうから、その言わんとするところを聴かずして直ちに征討令を発するのは、維新第一の功臣たる西郷に対する処置としては甚だ忍びない」という建白書を出そうとしたが、時期を失して間に合わなかった。

そこで福澤は更に筆を改めて、「一時休戦して、臨時裁判所を開き鹿児島士族の名代人を召喚して、一般の傍聴を許した公開の法廷にて、その言わんと欲するところを述べさせ、公平至当の審判処分を下さん事を希望する」という趣意の建白書を認め、義塾の教員須田辰次郎に持参させ、中津士族5名の連署で、京都の行在所に捧呈させた。

福澤は、何とかしてこの戦争を最後の土壇場まで追い詰めぬ段階で、停止させようと

努力したものである。西南の役の落着後、直ちに筆を執って「丁丑公論」を脱稿、明治 34 年 2 月に発表し、西郷隆盛の明治維新での功績を称えた。

(勝 海舟)

勝 海舟と西郷隆盛とは、1864 年 9 月と 1868 年 3 月に歴史的会談をしており、お互いに尊敬し合う仲であった。

明治 10 年に西南戦争が勃発した時に、海舟には起ちあがって西郷を応援したい気持ち充分あったと思われる。海舟と西郷は相重んじた仲であり、又海舟は新政府の専制政治にも不満を持っていたからである。しかし海舟が旧幕府を扇動して、旧知の部下がいる海軍にも働きかけて西郷と呼応したならば、どのような事態が生じたであろうかは、容易に想像し得るところであった。したがって、海舟は起たなかった。起たないどころか、連日連夜奔走して、旧幕臣が反乱軍に身を投ずるのを未然に防いでまわった。その結果、旧幕臣からは、反乱軍に馳せ参じた者はいなかった。整然と統制し力を抑制して官と薩との間にある中立勢力たる旧幕臣グループの、隠然たるを新政府に示す事、これこそ明治 10 年の危機に当たって海舟が試みたことであった。

このように、海舟は西南戦争では、西郷に救いの手を差し伸べなかったが、明治 12 年 6 月、南葛飾郡浄光寺境内に、私費で西郷の記念碑を建立したり、西郷の遺児である寅太郎のために、洋行留学費を宮中から出させるために奔走したり、西郷のために粉骨砕身し、真心を尽くしている。

5. 日清戦争

(福澤諭吉)

「明治維新以来、日本は西歐を手本として文明開化に取り組んで来た結果、国民の気力も旺盛で文明の進歩も甚だ速やかで、我が国は早くも東洋に於ける文明国の魁となったが、東洋の全面を見渡せば西歐諸国の圧力ますます強い中、東洋に於いて僅かに独立の形を保っているのは支那と朝鮮のみである。その支那は頑迷固陋にして世界の大勢を知らず、朝鮮は徒に孤立逡巡して排外の気風のみ強く西力東漸の火の中にあつて、正に藁屋根同然の抵抗力のない有様である。日本は自国独立の自衛上どうしても朝鮮を誘導しこれを堅固な建物とし、三国相提携して火災の蔓延を防がねばならぬ」

(時事新報「朝鮮の交際を論ず」明治 15 年 3 月 11 日)

福澤は、時事新報に掲載された最初の朝鮮論で、上記のように語っている。

しかし、日本が朝鮮の文明化に力を注いでいる時に、これを妨害しようとしているのが清国である。したがって清国に戦争で勝利して朝鮮への干渉を止めさせなければならぬ。日清戦争はそのための戦争である、として時事新報で下記のように訴える。

「日清の戦争は文野の戦争なり」(明治 27 年 7 月 29 日、時事)

「戦争の事実は日清両国に起こりたれど、根源を尋ぬれば、文明開化の進歩を謀るもの

と、進歩を妨げんとするものとの戦いにして、両国間の争いにあらず。本来日本人は支那人に私怨なく敵意なし。世界の一国民として普通の交際を望みたれど、彼らは「頑迷不靈」にして文明開化を悦ばず、反対に妨げんと反抗の意を表したるが故に、止むを得ず事のここに及びたるのみ。」

福澤の軍事上の積極性は、領土的な野心によるものではない。清国に対して決定的な勝利なくしては実効無しとする判断と、清国の朝鮮干渉を根絶せんがためであった。

こうして時事新報の社説に連日筆を執ったのは勿論のこと、軍費寄付運動を起し、自ら金壱萬円を投じて「国民奉公」を奨励した。

そして、日清戦争に勝利すると、下記のように喜びをあらわにした。

「・・・日清戦争など官民一致の勝利、愉快とも有難いとも云いようがない。命こそあればコンな事見聞するのだ、前に死んだ同志の朋友が不幸だ、アア見せて遣りたいと、毎度私は泣きました。・・・」【「福翁自伝」：「老余の半生」の（行路変化多し）】

（勝 海舟）

勝 海舟は徹底した日清戦争反対論者であった。その理由を説明する資料は勝 海舟著「氷川清話」以外に無いが、勝の非戦論の由来の一つは、幕末に於ける勝の「日清韓三国提携論」にあったのではないかと考えられる。

これは「氷川清話」の中に引用している〔海舟秘録〕の一節であるが、文久 2 年に軍艦奉行に登用された勝は、「海軍を拡張し、営所を兵庫対馬に設け、その一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三国合縦連衡して西洋諸国に抗すべし。」と 14 代将軍家茂に提言し、翌年の文久 3 年に採用され、神戸軍艦操練所が開設される。

この勝の、日清韓三国提携論は、元治元年（1864 年）に勝が軍艦奉行を罷免され、さらに翌年に神戸軍艦操練所が廃止された事により挫折するが、維新後も勝の内面に深く定着して、それが日清戦争に対する勝の態度決定に大きく影響したと考えられる。

このような勝の非戦論は、戦争の結果が日本に有利になっても変らなかつた。勝にとって日清戦争は、日本の勝利にも拘らず、西南戦争とともに明治維新後の日本が犯した二大失敗の一つであった。

勝は、むしろ日清戦争に於ける日本の勝利がもたらす影響を憂慮した。日清戦争後に予想される急激な軍備拡張、それがもたらす国民への過重な負担を憂慮したのである。そのことは、西南戦争後の国内に於ける猛烈なインフレーションで国民は既に経験済みであった。勝は、海軍主義者であったが、軍事を考える場合に、常に財政との関連を忘れなかつた。

しかも、日清戦争の戦中戦後を一貫して勝が非戦論を主張した根底には、日本の国益を図る政治的計算とは別に、清国及び朝鮮の人間と文化に対する、深い洞察と畏敬があったと思われる。例えば「氷川清話」の中で、清国についてこう述べている。

「支那人は一体気分が大きい。日本では戦争に勝ったと言って大騒ぎをやったけれども、

支那人は、天子が代わろうが、戦争に負けようが、殆ど馬耳東風で・・・平気である。社会というものは、国家の興亡には少しも関係しないよ。」

又、朝鮮に対する態度についても、当時から蔑視的な朝鮮観が日本において支配的になりつつあったが、その時流に勝は関与しなかった。「氷川清話」でこう述べている。

「朝鮮といえば半亡国だとか、貧弱国だとか軽蔑するけれども、俺は朝鮮も既に蘇生の時期が来ていると思うのだ。」「しかし朝鮮を馬鹿にするのも、ただ近来の事だヨ。昔は、日本の文明の種子は、皆朝鮮から輸入したのだからノー。」

このような朝鮮観に照らして考えると、勝が日清戦争後における日本の朝鮮に対する内政干渉政策を非難した所以も、容易に理解出来る。

6. むすび

◎ 第二次長州征討で福澤が執った態度から、福澤が終始幕府寄りであった、と判断出来ないのは明白である。「門閥制度は親のかたきでござる」（福翁自伝：幼少の時）と、言っているように、幕府に加担したくなかったが、「攘夷の旗」を掲げている（と福澤は維新前には信じていた）薩長には、幕府以上に迎合する事は出来ず、その時点では、「開国の旗」を掲げている幕府に加担したというところであろうか。

しかも幕府の士気が衰えていたとはいえ、若しもフランスからの借款が成立していたら、「長州再征」は成功し、歴史は変わっていたかもしれないのである。

これに対して、勝が執った態度は、明確な持論である「公武合体・雄藩連合による近代的統一国家の創立」に基づくものであり、理解出来るところである。

◎ 維新戦争での福澤の態度は、幕府にも加担出来ないが、攘夷派の薩長にはもっと加担出来ない。したがってこの時点では、「誰かが幕府を倒して欲しい」と思っているが、「おれらは自分でその先棒になろうとは思わぬ」と「福翁自伝」で告白している。又、「自伝」では「攘夷派の薩長にだけは倒して欲しくない」とも言っている。

{したがって、「理を講じ書を読んでいたという事実を以って、福澤先生はその性格に於いて、根本的に実践的タイプでなかった」（伏見猛猪・阿部仁三両氏著「福澤諭吉」）と、断じる論者もいる。いかにも、福澤自ら「その性質習慣がない」（福翁自伝）と、言っている通りなのであろう。}、（富田正文著「戦争と福澤先生」）

「[幕府] 対 [薩長] の戦いは、畢竟するに国内の問題であり、いずれは落ち着くべき所に落ち着くであろう。しかしその落ち着いた暁に日本は何れの方向を目指して進まねばならぬか。国内に於ける同胞相克の悲劇の幕が下りた瞬間に、日本の独立の危機という更に大きな悲劇の開幕のベルが鳴り響くの真なしとは、当時の何人も断言出来なかったのである。」（富田正文著「戦争と福澤先生」）

「したがって、福澤先生は、幕末の末年より明治の初年にかけては、国内的な政治の動向よりは、寧ろ日本全体としての諸外国に対する国際的地位を、より重要視した観がある。」（富田正文著「戦争と福澤先生」）

富田正文によれば、「維新戦争が決着した時こそが、福澤先生の出番なのである。」ということになる。「その性質習慣がない」事を福澤に強いるよりも、日本のために福澤が能力を発揮する場面がある、という事であろうか。

勝 海舟の態度は、「近代的統一国家」の創立を目指したものであり、明確に理解出来る。

不可解なのは、開国派であり攘夷派でない勝 海舟が、「幕府打倒」を実行した事に対して、福澤諭吉が「瘠我慢の説」で、「武士道精神を傷つける行為」と、勝 海舟を罵倒したことである。福澤も幕府を倒して、新しい日本国家を創立しようと考えていたであろうに、「瘠我慢の説」は俄かには理解し難い「お説教」ではないだろうか。

◎ 西南戦争での両者の態度は、馬鹿な戦争を止めさせようとする福澤の態度と、応援もしないが止めさせようともしない、成り行き任せの冷やかな勝の態度は、立場上で「否定的」と「消極的」となるが、大いに理解出来るところである。

しかも、西郷隆盛の人徳で、福澤も勝も後世に西郷の偉業を伝えるために、福澤は「丁丑公論」を著し、勝は記念碑を建立するなど、西郷の名誉回復に貢献している。

◎ 日清戦争での両者の態度は両極端である。

「朝鮮の文明化」を急がなければ、日本が西欧の植民地になる危険性があるとして、「朝鮮の文明化」を妨害する中国に対して「これは義戦である」と主張して、戦争を仕掛けた日本を、福澤は積極的に支持したが、妥当な行動であったと考えたい。

但し、朝鮮の「内政改革」をやったり、鉄道を設置するなどのインフラ整備の充実化を図ったり、教育や新聞発行などの「精神文明」の移入を実施したが、「朝鮮人の心」を捉える事が出来なかった。朝鮮の「国体」(ナショナリティー)に関わる問題であり、他国を文明化することが如何に難しいかという課題を残した。それにもかかわらず、日清戦争で中国に勝利した後は、更に朝鮮の文明化に関わって「内政干渉」を行い、その後「日韓併合」と進み、実質的に朝鮮を日本の植民地にした。日本は福澤の文明化という考え方から逸脱した方向に朝鮮を導き、その後中国も侵略し戦争を拡大して行く。

これに対し、勝の日清戦争反対の態度は、明治27年に至る過程での勝の東洋政略論が見えないので、「日清戦争反対」と叫ばれても、「ではどうすればいいのか？」という質問に対しての回答が出てこない。勝が幕末時に抱いていた「日清韓三国提携論」が、幕末から明治初期に明治新政府の話題として取り上げられていれば、「戦争か提携か」となるのであろうが、明治初期には、西郷らの「征韓論」があったくらいであるから、「三国提携論」などは無視されたであろう。それに「征台論」も出て実際に、中国領土の台湾を攻撃して植民地化し、中国政府の反発を招いている。

このような状態では、「日清韓三国提携論」を勝が主張しても、それは「理想論」で終わったであろうと予想される。しかし勝の「清国及び朝鮮の人間と文化に対する深い洞察と畏敬」が朝鮮統治に活かされていれば、朝鮮の文明化は成功したかもしれない。

以上